

# 日英博覧会と明治政府の外交戦略

Japan-British Exhibition of 1910 and  
Diplomatic Strategies of the Meiji Government

楠 元 町 子

KUSUMOTO Machiko

## 1. はじめに

本稿は、幕末に締結した不平等条約の改定やアジア進出を進める明治政府が、日英博覧会の開催を通して、どのように英国の日本に対する理解と好意的世論の形成を図ったか、その方法と効果を考察するものである。日本は1910（明治43）年8月韓国併合、1911（明治44）年2月に関税自主権の完全回復を実現し、同年7月に日英同盟を継続更新した。

日英博覧会は1910（明治43）年5月14日から10月29日までイギリスのロンドンで開催された。当初5月12日に開会予定であったが、開催直前の5月6日にイギリス国王エドワード7世が崩御され、開催中止延期も考えられたが、新帝ジョージ5世と名誉総裁コンノート殿下の配意により、5月14日に喪中儀式を行わず開会した<sup>1)</sup>。

欧米諸国の日本への共感と理解を極めて必要とした時期に開催されたのが、日英博覧会である。日英博覧会に対しては、日本の展示に比べて英国の展示が3分の一に過ぎず、展示内容も極めて乏しかったことで、実質上は日本博覧会であったのではないかという指摘<sup>2)</sup>や、日本の相撲、演芸等に注目が集まり、遅れた珍奇な日本というイメージを英国に広めたに過ぎないという批判<sup>3)</sup>がある。一方、英国及び欧州での輸出増進を考え、日英博覧会に出展した企業や大阪府や埼玉県など地方自治組織は、博覧会における展示品への観客の反応を分析し、製品改良を図るなど貿易上一定の効果はあったとする指摘<sup>4)</sup>もある。

日英博覧会に関する研究としては、日英博覧会を小村寿太郎の重要な外交戦略と位置づけ、その開催経緯を検証した河村の論文<sup>5)</sup>や日本大博覧会計画や日英博覧会の内容と日英両国の反応を考察した伊藤の著書<sup>6)</sup>、日英博覧会とアイヌ人の関わりを研究した宮武の論文<sup>7)</sup>がある。

本稿は、海外での博覧会で初めて皇族として総裁を務めた、日英博覧会名誉総裁伏見宮貞愛親王の動静や、東洋館における台湾、朝鮮、満州鉄道株式会社、関東都督府の展示の実態を、日本政府の外交史料や当時の新聞記事、英国の公式報告等を考察する事により、明治政府が日英博覧会に如何なる意図を持って臨み、どのような効果をもたらしたのか、明らかにしたい。

## 2. 日英博覧会の概要

### 1) 日英博覧会の開催経緯

日英博覧会 (Japan-British Exhibition) は、1910 (明治43) 年 5 月 14 日から同年 10 月 29 日まで、ロンドン西郊シェファーズブッシュで開催された。会場は地下鉄道その他市内各種交通機関の便宜性に優れ、各地方よりロンドンに来る鉄道は会場に接して駐車場があったため、頗る交通便利な位置にあった。

1908 (明治41) 年 1 月 9 日に、在英大使小村寿太郎から外務大臣林薫に日英博覧会の開催について次のような書状が届いた<sup>8)</sup>。「英仏博覧会委員長イムレ・キラルフィー氏から博覧会終了の翌年即ち明治四十二年を以て、其設備を利用して、日英博覧会を開催せんことを勧説せり。日本に於いても大博覧会の開催を眼前に控え今日多大の国難あり、開催計画を遂行するのは至難であるが、英仏博覧会の設備利用の一点は自ら実行を容易に出来ない一要素であるから、帝国政府も相当な考慮を望む。」更に 3 月 6 日には小村から林に次のような電報が届いた<sup>9)</sup>。「博覧会の件に関し先方への都合あるに付御詮議の結果電報ありたし若し此機会を利用し本件実行なし得るに於てい現下の日英関係上利益多かるべしと思考す為念申添ゆ」小村寿太郎は、日英同盟継続のために日英博覧会の開催を強く希望していた。林外務大臣は日英博覧会計画の内容に関し小村駐英大使と書簡往復を重ねた後、6 月 23 日次のように回答した<sup>10)</sup>。「帝国政府は本件博覧会実行の希望を有するも目下経費出所講究中にて未だ確答を与える時期に至らず」

すでに 1907 (明治40) 年に明治政府は日露戦争 (1904~1905 年) の戦勝を記念して、1912 (明治45) 年に東京で「日本大博覧会」を開催することを決定していた。外務省は各国大使及び領事を通じ、この博覧会の計画と主旨を諸国政府に通知し、米国では 1908 (明治41) 年 5 月に、同博覧会への賛同法案が出資金 150 万ドルとともに議会で可決されたが、日本大博覧会は予定より経費が増大したためと準備不足を理由に、1908 (明治41) 年 9 月に 5 年間延期されることになり、結局中止された<sup>11)</sup>。

1908 (明治41) 年 7 月に内閣改造があり、小村寿太郎は駐英大使から外務大臣になったが、大浦農商務大臣と本件に関する協議をすすめた。日英博覧会参同費 180 万円の経費を第 25 回帝国議会に提出し、衆議院及び参議院とも本会議においては質問も無く満場一致で可決した<sup>12)</sup>。1908 (明治41) 年 10 月 16 日の閣議において日英博覧会の開設を決定した。閣議決定書の要旨は次のようであった。「帝国政府は日英同盟の帝国外交の骨髄たることを確認し、将来該同盟を厳守すると同時に日英両国の関係を益々親密ならしたるの方針を執るべきことを決定せり而して両国々交の親善を計るに方りては両国政府間の親交を敷くことを勉むべきは勿論機会のある毎に両国々民の交情を増進するの途を講ずることも亦大に必要にして日英博覧会開会の如きは此目的を達する為最も有効なる手段と認む云々」<sup>13)</sup>

日本政府は、在英大使館を通じてイムレ・キラルフィーを代表とする博覧会会社と交渉を開始し、1909 (明治42) 年 3 月 31 日駐英加藤高明大使が日本側を代表して契約書に調印し、日英博覧会が正式に成立した<sup>14)</sup>。同年 4 月、日英博覧会事務局を農商務省内に置くことを告示し、

日英博覧会総裁として農商務大臣大浦兼武、副総裁に男爵松平正直、事務官長に日本大博覧会事務総長の和田彦次郎を任命した。

## 2) 開催の目的

明治政府農商務省は、日英博覧会事務局事務報告で日英博覧会開催の意義を以下のように記載している<sup>15)</sup>。相互国際博覧会は政治上、社会上、並に商業上に緊切な利害関係を有する二国が協力して開設するもので、博覧会の先駆者たる英仏両国が1908（明治41）年ロンドンで開催している。日英博覧会は、両国の国土、気候、国情が類似し、同盟を締結して互いに国運の隆興を図り共通商関係の如きは極めて重要とする所なれば、其の親善なる国交を強固にし且「兩國商業の進展上互に相知悉するの機会あらんことは両国民宿年の希望たりしものにして日英博覧会の開設は実に此希望の実現に外ならざりしなり」と述べている。

更に日英博覧会が、これまで日本が海外の博覧会に参加した場合と大きく異なる点を挙げている。「外国博覧会に対して皇族を名誉総裁に奉戴し総裁親く名誉総裁宮殿下に随伴して共に博覧会場に臨みしことは我博覧会参同史上未だ嘗て類例を見ざる所にして且帝国軍艦並に陸軍軍楽隊を派遣せし如きは我国家か如何に本会の外交的效果を重要視せしかとするに足るべし」<sup>16)</sup>

日英博覧会は「其の国際上に及ぼす関係重要なのみならず英国側に在りては皇族を名誉総裁に戴けるが故に総裁の上に名誉総裁を置き皇族中より勅命せられることになった」<sup>17)</sup> このことでお互いに皇族が博覧会の名誉総裁となった。

英国政府は総て英国内地に開設する博覧会に対し、その性質が内国的国際的に関わらず金銭的補助はせず、直接博覧会の組織に関係する事はなかった。しかし、日英博覧会の主旨を英国政府に説明し翼賛を得る必要があると考え、1909（明治42）年2月加藤在英大使から英国外務大臣へ博覧会について通告し次のような回答を得た。「日英博覧会は同盟両国間に現在する関係を一層強固ならしむるものなりとし英国政府に於いては此の擧に対し同威を表す旨なり」<sup>18)</sup>

英国側はアーサー・オブ・コンノート親王殿下（Arthur William Patrick Albert、1850-1942、以下コンノート殿下）を名誉総裁に奉戴し、英国貴族中の首班であるノーフォーク公爵を総裁とし、副総裁として英国朝野の間に重望を負えるダービー伯爵、ジャーシー伯爵、ロンドン市長等10名が任命された。コンノート殿下はビクトリア女王の三男であり、1906（明治39）年英国皇帝より日本の天皇陛下に「ガーター勲章」贈呈の使節として日本に渡航され、その時日本各地を訪問し、日本国民の敬慕を受けられていた<sup>19)</sup>。日英博覧会の事務総長はイムレ・キラルフィーであった。

## 3) 西洋と東洋の結合

日英博覧会の英国側企画者イムレ・キラルフィー（Imre Kiralfy 1845-1919、以下キラルフィー）は、オーストリア・ハンガリー帝国で生まれ、後にイギリスに定住した。キラルフィー

はロンドンのシェファーズブッシュで、140エーカーの敷地を整備して1908（明治41）年英仏博覧会を開催し、800万人の観客を集め大成功を収めた。その人物像に対しては、読売新聞で「日英博覧会は全く狡児の為に致されたものなり、即ち興業主のキラルフィーの人格は英国に於いても紳士淑女の矚瞠して措かざる所にして、此くの如き人物に対しては予め慎重の研究を要すべき」<sup>20)</sup>と報じられているように日本では良い評判はなかった。一方日本政府はキラルフィーについて「博覧会事業に経験を積み之の経営に特長の技能を有す」<sup>21)</sup>と述べ、博覧会開催者としての実力を高く評価していた。

日英博覧会の公式ガイドブックの序章に、キラルフィーが今から30年前にサンフランシスコで、店のウィンドウに飾られた芸術作品を批評している二人の日本人に出会ったことが、日英博覧会を計画した大きな理由であると記載されている。「国民が働き者でこのような優れた才能を持っているような国は、歴史と文明の面で極めて興味深いものに違いない。彼らが持っているに違いない学識のいくらかでも学べば、世界の他地域にとっても利益となるだろう。彼らの国には、想像力をかきたてるような驚くべきものがあるに違いない。やがて彼は、当時ほとんど知られていなかったこの極東の島民を代表する多数の学識者と知り合いになるという幸運に恵まれた。彼らの作法に魅了され、会話を重ねることによって彼らの国について大いに啓発された彼は、いつか東洋と西洋をその相互利益のために引き合わせる手助けをしようと決心した。」<sup>22)</sup>キラルフィーは、日本人と日本という国に興味を抱き、東洋と西洋を引き合わせようと考えていたのである。

日本人が日英博覧会を開催する理由として *The World's Work* は「ロンドンの日本」という記事<sup>23)</sup>で興味深い指摘をしている。日本人には、一つのモットーとして「徹底的に」がある。近年巨大な規模の博覧会は、世界列強の流行となっている。日本は博覧会に参加して、国の資源や産業を一般向けに展示し、大きな利益を得ようとし、1912年には東京で大規模な博覧会の開催を計画していた。その時世界最大級の都市ロンドンの真ん中にミニチュアサイズの日本を再現する、東洋を西洋に持ち込むという計画が日本に提案された。日本は東京での博覧会開催や他の博覧会への参加を取りやめ、この英国の大都市で十分な出展をすること、そして、古い欧州を驚かせるような完全かつ広範な規模とすることに全エネルギーを集中することに決定した。

更に、日英博覧会に天皇の存在が大きく影響したと次のように述べている。「日本国天皇が、日英博覧会開催の重要な部分を担った。天皇は、このプロジェクトを自ら創始して大切に育て、臣下に自分の熱意を染みこませたため、サハリンから台湾まで、誰も彼もが、この計画を唯一の話題とすることに努力を惜しまないという結果となった。政府は、極度の儉約をかなぐり捨て、この計画の策定に185,000ポンドを投じた。どの英国人にとっても、東洋への旅に出ることや、この若い国の研究を居ながらにして行うことは困難であるが、シェファーズブッシュを訪ればそれと同じことができるのである。」

20世紀初頭欧米諸国はアフリカにおける勢力範囲を確定し、アジア特に中国への勢力拡大を

図っていた。そのため、列強相互間で様々な条約を締結する事によって、お互いに最大な利益を得ようとしていた。

#### 4) 20世紀初頭の世界情勢

日清戦争後、日本は欧米列強に挑戦し、「大東亜共栄圏」をスローガンに、アジア対欧米列強という対立構図を示しながら東アジアへ進出して行った。明治政府は1904（明治37）年のセントルイス万博の成功が、ポーツマス条約の締結に大きな意味を持ったと考え、万博を外交政策に積極的に活用しようとした。日本のアジア進出のためにはイギリスとの同盟は極めて重要であり、日英博覧会は明治政府の対外戦略上大きな意義を持っていた。

日清戦争後欧米諸国は中国領土内の利権獲得を積極的に進め、ロシアは東北地方、ドイツは山東地方、イギリスは長江流域と広東東部、フランスは広東西部と広西地方、日本は台湾の対岸にある福建地方での利権の優先権を清に認めさせ、各国の勢力範囲が定められた。

ロシアはフランス資本導入のため1891（明治24）年露仏同盟を結び、イギリスはロシアの東アジア進出に対抗して1902（明治35）年日英同盟、ドイツへの対抗として1904（明治37）年英仏協商を成立させた。ロシアは東アジアからバルカン半島への進出策に転じ、ドイツ・オーストリアと衝突し1907（明治40）年英露協商を成立させた。英仏露の提携関係を三国協商と呼んでいる。

ドイツ・オーストリア・イタリアは1882（明治15）年に三国同盟を結んでいたが、イタリアは領土問題でオーストリアと対立するようになり、フランスに接近していた。三国同盟の実態はドイツ・オーストリアの二国同盟に近かった。

日本は1905（明治38）年9月ポーツマス条約により、韓国の指導・監督権、遼東半島南部の租借権、南満州の鉄道利権、樺太の南半分の領有権を得た。1905（明治38）年6月桂・タフト協定により、日本の韓国に対する、アメリカのフィリピンに対する優先・支配権を相互に尊重することを承認していた。1907（明治40）年には日本はロシアと日露協約を結び、両国が中国から得た権利の相互尊重を約束し、フランスと日仏協約を結び、フランスのインドシナ、日本の韓国・関東州などにおける相互の地位を認めた。

このような世界状況を背景に日本は1904（明治37）年第一次日韓協約、1905（明治38）年第二次日韓協約、1907（明治40）年第三次日韓協約により日本の韓国への支配を強めた。1909（明治42）年7月6日日本政府は韓国併合を閣議決定していたが、併合の時期は未定であった。1909（明治42）年10月26日安重根が伊藤博文をピストルで狙撃し、伊藤は絶命した。1910（明治43）年5月30日寺内正毅陸相に韓国統監兼務が命令され、8月22日「韓国併合に関する条約」に寺内と李首相が調印し、韓国を完全に日本の植民地とした。「韓国併合は日露戦争ののち日本の勝利に大きな鼓舞を感じたアジア諸民族の一部に冷水を浴びせた。列強は日本による韓国の併合をアジア分割の最終的完了と受け取った。帝国主義国の仲間入りをした日本とすでに満州を失ったに等しい老帝国清国の他、独立国として残ったのは東南アジアのシャムだけであっ

た。」<sup>24)</sup>

日本は日英博覧会開催期間中に韓国併合を進めていたのである。日清戦争後にドイツ、フランス、ロシアによる三国干渉の結果、日本は下関条約で清から得た遼東半島を返還せざるを得なくなり、その再来を心配していた。欧米諸国特に同盟関係にあるイギリスの日本に対する好意的世論を形成することで、外交上の効果を狙っていた。日英博覧会は、日本の植民地政策が多くの利点を植民地の人々に与えている事を、英国の人々に見せる絶好の機会であった。

### 3. 明治政府の外交戦略

#### 1) 伏見宮貞愛親王と皇室外交

伏見宮は崇光天皇(1334-1398)を祖とし、明治維新後の十余宮家の内、梨本、山階、閑院、久邇、東久邇、小松、華頂、北白川、東伏見、賀陽、朝香、竹田の十二宮は何れも皆伏見宮の系統から出ている。そのため伏見宮は諸皇族の間で最も重きを置かれていた<sup>25)</sup>。伏見宮貞愛親王(1858-1923、以下伏見宮殿下)は1858(安政5)年4月28日に伏見宮邦家親王の長男として誕生した。

伏見宮殿下は1894(明治27)年日清戦争において歩兵第四旅団長として旅順及び威海衛等を歴戦し、1896(明治29)年天皇陛下の御名代として露国皇帝陛下の戴冠式に参列した。日露戦争では1904(明治37)年第一師団長として出征し、南山の役で大活躍し、同年陸軍大将に昇進した。日露戦争中の1904(明治37)年11月19日から24日までセントルイス万博を訪問し、その後ワシントンを訪れ、ルーズベルト大統領と謁見し、天皇の親書を渡した。セントルイス万博において、伏見宮殿下の行動は度々新聞記事に写真と共に掲載され、日本の近代化を象徴する役割を果たし、米国の好意的世論の形成に役立ったのである<sup>26)</sup>。

伏見宮殿下は、特命全権大使男爵高平小五郎、内閣総理大臣秘書官で日英博覧会事務官杉竹二郎、馬場別当(事務官)、塚田御付武官を従い1910(明治43)年3月26日に東京御発、28日神戸港にてドイツのロイド汽船会社のクライスト号に御乗船し、イギリスに出発された。クライスト号は上海、香港、シンガポール、コロombo等に入港し、「五月一日伊国ナポリに着港す可きを以て、四月三十日船長は食堂に装飾を施し、正面に聖上、皇后宮、独国皇帝及び親王の肖像を掲げ、特に意を用いたる晚餐を供し、楽隊をして日独両国家を奏せしめ、餐後船員をして提灯行列を行はしむる等、親王に対し深甚の敬意を表し奉り」<sup>27)</sup>

1910(明治43)年5月1日伏見宮殿下はナポリに上陸し、翌日ローマに赴かせられ、四日間御滞在され、イタリアの皇帝(Vittorio Emanuele III, 1869-1947)、皇后、皇太后に御謁見された。ローマ滞在中に、駐英大使加藤高明から4月30日附で随員高平大使に次のような電報があった。「四月二十八日皇帝秘書官より陛下に於ては『ヨーク、ハウス』を伏見宮殿下の御用に供し陛下の賓客となされたき思召の趣を通知し来れり」<sup>28)</sup>伏見宮親王は、英国側の申し入れを承諾なされ、10日に英国へ赴き12日に日英博覧会に台臨の御予定となった。

伏見宮殿下は5月6日にローマを辞して、7日に巴里に到着したが、その日に英国皇帝エド

ワード七世陛下崩御の悲報に接した。「一旦御英渡英見合はせの上『ヨークハウス』の御使用を辞せられ一時巴里に御滞在し、(中略)陛下御名代として当国先帝の大葬に御参列の大事を奉ぜられたる」<sup>29)</sup> 18日にロンドンへ向かわれた。

19日には、英国皇室及び大葬儀に参列のためロンドンに滞在している独国皇帝、葡国皇帝をバッキンガム宮に、西国皇帝をサウス・ケンシントン宮に、白国皇帝をセント・ゼームス宮に、土耳其国皇太子、伊国ダオス公、奥国フランツ・フェルディナンド大公などを其の宿舎に訪問された。<sup>30)</sup> その夜バッキンガム宮殿で晩餐会が開かれた。宴席では「貞愛親王殿下には各皇帝奥土両国皇諸に露国皇弟ミハエル、アレキサンドロウツチ大公及び伊国皇弟アオスタ公の下位に居られたるも『ルーマニ』及び『セルヴィヤ』の皇太子を始め其他諸国皇族の上位を占められ」<sup>31)</sup> アジアの皇族であるがヨーロッパにおいても存在感を示す事が出来た。

20日に大葬儀に御参列し、喪中の事として、伏見宮殿下は御滞在中国賓の待遇を辞退されて、何処への御成も御微行で、博覧会には24日に初めて来られた。英国側の名誉総裁コンノート殿下が、当日御同様御微行で成られ、伏見宮殿下と御同列で場内を御巡覧になった。場内の第二号、第三号館を御巡覧ありてガーデンクラブに入り、博覧会関係邦人約百名に謁を賜り、更に第二十四号、第二十六号館を御巡覧の後、ガーデンクラブでコンノート殿下と午餐を共にし、その後第四十九号、第四十八号、第四十七号、第二十三号、第二十一号の諸館、日本庭園、第十三号館、日本協会陳列所、第十四号館を御巡覧の後、一旦御帰還、晩餐後再び会場に到り、イルミネーション、花火等を台覧あらせられた。

25日午後、伏見宮殿下は御子息の博恭王、同妃と共にバッキンガム宮に御参内、皇帝、皇后に御謁見、少時御対話の後、暇乞の挨拶ありて御退出後、博覧会場へ赴き種々の余興を台覧した。其の夜、告別の為博覧会に関係した日英両国中の主な三十余名を御旅館に召して晩餐会を賜った<sup>32)</sup>。

27日伏見宮殿下は巴里に到着し、30日に非公式でエリーゼ宮にフェリエール大統領(Clement Armand Fallières 1841-1931)を訪ね、即日在佛日本大使館で大統領の答訪を受けられた<sup>33)</sup>。6月1日列車で露国に向かい、4日アレキサンドル離宮に滞在の露国皇帝ニコライ2世(Nicholai Aleksandrovich Romanov, 1868-1918)に謁見のため正装して参内し、露国皇帝より「サントアンドレイ」大勲章を受けられた。8日には露国鉄道特製の客車に御乗車され、シベリアを横断し、17日長春に到着された。長春御発車に際して、露国皇帝へ以下の親電を打ち、好意に感謝を示された。

「露国官憲の特別なる注意に依り、予は極めて安全に西伯利及び満州を通過し、最も愉快なる旅行を為すことを得たり。露国滞在中、予の常に陛下より蒙りたる優雅にして且つ懇意なる待遇に対し、予の至深なる感謝の意を預せられんことを」6月22日に神戸港に入港した<sup>34)</sup>。

上記に述べた伏見宮殿下の日英博覧会における御旅程には、当時の三国協商(英仏露)と三国同盟(伊独奥)の対立関係が大きく関わっていたことが、以下の在独珍田大使と小村外務大臣とのやりとりから伺われる。

1910年（明治43）年4月21日、ベルリンの珍田全権大使から小村外務大臣に、伏見宮殿下の御旅行の日程について当時の世界情勢から次のような懸念が示された<sup>35)</sup>。「高平大使の話に依れば伏見宮殿下御滞歐中、伊仏英露皇帝又は大統領を訪問し独逸を除く御予定の由在は専ら御旅行の御都合に出たる義なるべきも、偶然の結果欧州列強二大系統中英仏系統（伊国は三国同盟に属するも特別の地位を占む）に重きを構き故意に独逸を度外視する外観を呈し（中略）独逸の感情を害するが如きは得策にあらずと思ふす就ては左様際立てたる外観を避ける為」フランスの巴里は世界の大都市であり、皇族が御微行で訪問滞留しても公然訪問の必要はないので、大統領御訪問を考慮して欲しいとの申し入れがあった。

在独珍田大使は、伏見宮殿下が日英博覧会へ参列の旅程において、イタリア、イギリス、ロシアの皇室を訪問するのは差し支えないが、フランスの大統領と面会したにも関わらず、ドイツ、オーストリアの皇室を訪問しないのは日本政府に何か意図があるように思われることを心配したのであった。このことについて、小村大臣は珍田大使へ次のように直ちに回答した<sup>36)</sup>。伊仏両国は伏見宮殿下の御渡英の順路に当るので皇帝及大統領を御訪問するのであって、独逸に御立寄らないのは御帰還を急せられる為である。露国皇帝は御旅行の御都合上、露都御滞在中に御訪問され、独皇室御訪問なきも特別の意味はない。独逸政府に誤解ないように説明して欲しい。

伏見宮殿下は、渡英前にフランスに滞在した時は、フランス大統領が不在であった為御訪問されなかったが、英国から日本への帰路に再びフランスに滞在した時は、非公式であるが大統領を御訪問された。小村寿太郎は外交戦略として、ドイツ、オーストリアとの関係悪化に配慮しつつも、三国協商国との関係を極めて重要視していたのである。

## 2) 饗宴

日英博覧会開催中は勿論其の会期の前後に於いて、同博覧会に関し日英両国側、その他の主催により多くの重要な盛宴があった。主要な宴会の席には両国の社会で有力な地位を有する来賓の乾杯演説等が行われた。宴会の様子は英国の新聞に詳しく掲載され、人々に広く知られ、日英博覧会に関する披露の外、日英親交に極めて有効な役割を果たした。これらの宴会の内容を検討する事で、当時の日英関係を理解する一端となると思われる。日英博覧会に関して催された宴会とそこで披露された日英関係に関する重要な演説は以下の通りである。

1909（明治42）年7月27日日英博覧会披露晩餐会<sup>37)</sup>が同博覧会名誉総裁コンノート殿下御主催の下に開催された。列席者は英国知名の実業家や地方の市長なども招待され238名であった。日英両国皇帝陛下の勅語をコンノート殿下に賜り、殿下が朗読された。英国皇帝陛下勅語は「国際博覧会は個人の助力に負う所多し此故に朕は日英両国民が両国間の通商貿易を盛大ならしめ同時に既に両国間に現存する友誼的關係を一層密接ならしめんことを目的とする本業を助成せん事は朕の望む所なり」であり、日本皇帝陛下の勅語は「朕は此機に於て殿下及び殿下と共に日英博覧会の設置に参与せる諸士に向て謝意を表し併せて衷心より同博覧会の完全なる



成功を祈る」であった。

次にコンノート殿下は3年前に日本を訪問した時に歓待厚遇を受けたことへの感謝を述べ、日英同盟について次のように言われた。「吾人は東洋の平和を確保せむか為に同盟したり而て本博覧会の大目的たる両国民間の合致を更に緊切にして併て相互の友情を増進することに向て裨益する所あるべきは予の確信する所なるへし」加藤大使は、博覧会が貿易増進になり、更に「日本は不幸にして近年二回の最大戦争に興りし為に好戦国民なりとの誤解を招くも実は日常致々として各種の平和の技術と親み居るものなり」と述べ、日本人への誤解を解く場になることへの期待を表明した。

1909（明治42）年11月5日倫敦市長主催午餐会が名誉総裁コンノート殿下を主賓として、加藤大使、日英博覧会総裁ノーフォーク公爵やロンドン市実業家及び新聞記者等日英博覧会に直接間接に関係する約140名を招待して市長官邸で開催された。コンノート殿下は、「祖父皇配殿下が1851年倫敦で開催した博覧会に関係し同じく市長官邸に於いて演じられた言辞を引用し且つ日英博覧会は日英両同盟国間の政治上及商業上の合同を強固ならしめ益々両同盟帝国の利益を増進せしむるものなり」<sup>38)</sup>と挨拶された。

1910（明治43）年7月7日大浦総裁歓迎会が、名誉総裁コンノート殿下、総裁ノーフォーク公爵、博覧会参事会及び事務総長キラルフィーの連名で案内状を発送して開催された。列席者は、英国側は著名な貴族や倫敦市参事会長など、日本側からは徳川公爵、大使館員、在留邦人で重要な人物等で340人以上だった。コンノート殿下が「日本は最近の聖路易博覧会に於て、殖産、訓育の点に於て恰も当時彼が、満州に於て軍事上の大勢力を示して博したると同じ稱譽を博した、然かも未だ今回の博覧会に於ける如く十分完全に我等欧州人をして日本の技量、産業のみならず其の経済上の進歩発達を研究するの機会を与えた事は無い此の大博覧会は東洋に於て優秀の地歩を占め得た日本が今や西洋に向かって友誼的な競争を試みんしつつある事を示す実物教育である。」<sup>39)</sup>

1910（明治43）年10月27日日英博覧会成功祝賀会が、博覧会総裁ノーフォーク公の主催により、博覧会が滞りなく閉会に到った事を記念して開催された。コンノート殿下はヨークで軍務に服していた為出席されなかったが、列席者は百余名であった。伏見宮殿下や大浦総裁の祝電、コンノート殿下の日本事務局や英国側に賜った令旨が朗読され、日本事務局による博覧会関係者への謝意が述べられ、最後に副総裁ブラキ卿は日英博覧会の効果を知ってほしいと「倫敦市中著名のハローツ外五大商会の日本商品売行に関する書簡を読み上げた。」<sup>40)</sup>

上記以外にも1910（明治43）年2月14日和田事務官長歓迎会、同年7月15日加藤大使主催宴会、同年7月20日生駒艦将校歓迎会など多くの饗宴が開催された。これらの饗宴には、多数の新聞記者が招かれ、英国国民に真の日本を知らせようとする明治政府の広報活動として大きな役割を果たした。日本が欧米と同様な近代国家であり、日本の教育制度や公共施設が如何に優れているかを具体的に示そうとしたのが東洋館（Palace of the Orient）であった。

#### 4. 東洋館と日本の植民地政策

##### 1) 日英博覧会会場

日英博覧会は、1908（明治41）年開催の英仏博覧会の際使用した地所及び陳列館を使用し、会場敷地の面積は約168,000坪又出品陳列館は鉄骨に依り防火の設備完全なる構造を有するもの20棟より成り其総面積21,670坪であった。日本は20棟の陳列館中9棟、その面積6,741坪を日本出品部に充てた。この外5,670坪の日本庭園を建造することになった。

日英博覧会の出品陳列坪数6,741坪数は、1893（明治26）年市俄古万国博覧会1,881坪、1900（明治33）年巴里万国博覧会1,226坪、1904（明治37）年聖路易万国博覧会3,672坪であり<sup>41)</sup>、これまでの万国博覧会と比較して破格な陳列面積を得たのである。

日本の陳列館は、2号館（日本工業館）、2号館 A（日本園芸館）、3号館及3号 A館（日本景色館）、12号館（日本歴史館）、13号館（日本織物館）、21号館の日本部（日本富源館）、23号館（東洋館）、24号館（日本政府各省出品館）、26号館（日英美術館）、47号館（日本婦人製作品、教育、山林、美術工芸館）であった。庭園は、甲号（日本平和園）、乙号（日本浮島園）二ヶ所に設営された。喫茶店は、36号館の中に台湾喫茶店、日本庭園内に日本喫茶店が設けられ、緑茶、烏龍茶の普及が図られた<sup>42)</sup>。

普通万国博覧会では、主催国の意向により会場の陳列場所が設定され、参同諸国は単にその指定に従って自国の出品をしているに過ぎないが、日英博覧会は総て両国当事者の契約に準拠して決定された。

24号館（日本政府各省出品館）の館内は、中央大通路の左方に内務省衛生試験所、逓信省、海軍省、右方に赤十字社及び陸軍省の出品があった。24号館に向き合って建てられていたのが23号館であった。23号館は東洋館（Palace of the Orient）と呼ばれ、台湾総督府が其の面積の3分の2を占め、残りの3分の1を韓国統監府、関東都督府及び南満州鉄道株式会社の出品が占めていた。館内の天井には、白地に赤色で旭日及櫻花を表せる幕を張り以て旭日に匂う櫻花の下に支配している地方の出品である事がわかるようにしていた<sup>43)</sup>。

日英博覧会の英国における公式報告では、東洋館について次のように紹介している。展示に関しては、展示物の送り元である地域の特徴が表れるよう、多大な注意が払われた。台湾のセクション内の露店は、台湾の建築様式に厳密に従って建造され、風変りな曲線と、鮮やかな色彩の装飾が施された。このセクション全体の配置は、台湾に代表される島の雰囲気が出るように考案され、結果として最も大きな成功を収めた。南満州鉄道株式会社は、満州内で最も印象的な史跡の一つである鼓楼の複製を展示し、関東都督府は、遼東半島でよく見られるような特異な仏塔を展示することにより、それぞれの地域の印象的な特徴を各セクションで展示することに成功した。門を覆う幻想的な形の屋根、韓国からの出展物を囲んでいる壁は、韓国の建造物の顕著な特異性を示していた。東洋館に収容された独特な展示物は、それぞれその地域を象徴する建物の中に展示されていた<sup>44)</sup>。

東洋館はエキゾチックな雰囲気を醸し出していた。万国博覧会で欧米諸国が自国の植民地パ

ビリオンを建設する事で、富と権威を見せたように、日本も東洋館全体で日本の支配下にある地域を見せようとしたのである。

## 2) 台湾

台湾は1894（明治27）年の日清戦争で清（中国）が日本に敗れ、締結された下関条約で日本に割譲された。台湾の官民はこれに反対して立ち上がり、講和条約批准後の1895（明治28）年5月、「台湾民主国独立宣言」が出された。台湾に上陸した日本軍は、台湾人の激しい抵抗に遭い、日本は武力で台湾を領有した。日本はアジアの国として初めての、かつ唯一の、アジアにおける植民宗主国であった。「植民地支配に普通に見られる経済的収奪の他に、日本は台湾を日本の植民地統治の『ショーウィンド』に仕立て上げたのである。」<sup>45)</sup>

東洋館での台湾の展示は次のようであった<sup>46)</sup>。台湾の資源、教育、ならびに日本によって育成された様々な産業を示す品で構成されていた。入口のすぐ近く、通路の片側の壁には、この未開の国における原始的な状態の先住民が絵画的に描かれていた一方、反対側の壁には、台湾の人々が茶畑で平和的に仕事をしている様子と同じく絵画的に描かれており、原始的状态と対比させることにより、日本の影響下に置かれてから進歩したことが示されていた。

中央に向かうと、この島の主要産物の一つである樟腦の巨大なブロックを配した大きな露店があった。この建物の両側の壁に沿って、敷物、帽子、バスケット、砂糖、パイナップルなどの主要産物、その他の熱帯農産物や商品、様々な種類の茶が展示されていた。茶は、今ではこの島の輸出品の中で重要な位置を占めている。織物、化学産業、滋養に関する展示物があり、また、鉱山や冶金に関する展示物もあった。実際、この島で生産されているほぼすべての代表的な品が展示に含まれていた。多数の写真や図、表、出版物があり、台湾の状況と発展に関する情報が十分に得られるようになっていた。

1910（明治43）年7月19日に発行されたロンドンタイムズ日本号では台湾について、日本の統治下で産業の進展、公共施設や学校の建設、法律の整備などの近代化がいかに進んだかを述べ、次のように結論づけている<sup>47)</sup>。「こうした事実からわかるのは、日本人はこの島の住民の状況を改善し、それと同時にその生産能力を大幅に高めたということである。日本人はさらに、統治者としての能力があることを世界に示すことになった。この任務は困難に満ちているが、彼らはその多くを克服した。また他者の権利に正当な注意を払うとともに、気が荒く時として兇暴な先住民族の扱いにおいて武力に頼る前に、文明化のために既知のあらゆる資源を使い尽くすという明らかな決意を持って、すべての困難に取り組んだ。」

未開人に対しても日本人は偉大な我慢強さと忍耐力をもって、節度ある方針を続け、劇的な効果を上げたようだと言われ、日本人は日本と台湾との交易が大幅に増えることによって生じ得る金銭的利益、ならびに、この島が日本人の移住のために供する便益を受ける権利があることは間違いない。他の場所では日本の態度についてどのように言われようと、この日出ずる帝国の敵国や競合国でさえ、台湾で成し遂げられたことについては、ほとんど責めることはでき

ないのである。」と台湾の平和と繁栄に日本が果たした役割について称賛している。

### 3) 韓国

日本は、韓国に対して1904（明治37）年から1907（明治40）年の3次にわたる日韓協約により、統監府の設置や韓国の保護国化を進め、支配を強めていった。韓国の民衆は、日本に対して義兵闘争を起こすなど激しく抵抗していた。このような時、日英博覧会は開催された。

読売新聞は1909（明治42）年9月韓国の出品について次のように報じている。「日英博覧会に対する韓国の出品は植民地台湾と同性質の下に統監府出品として23館を占領し古今の美術表象型を陳列し韓国式の門を建造することとし予算四万円を計上せり。」<sup>48)</sup> 台湾と韓国を同列に扱っていることが伺われる。

韓国の展示品は日英博覧会の英国の公式報告で次のように紹介されていた<sup>49)</sup>。「建物の一部分を囲んだ壁に穴が開けられ、韓国の建築様式による門が作られていた。この囲いの中では、日本の韓国統監府が、この半島の発展を示す多数の出展物を展示していた。中央には、この半島の地形図があり、壁に沿ってこの国のすべての農産物、製品の見本を含む展示品が並べられていた。韓国の天然資源の豊かさも、展示物で説明されていた。こうした展示物を用いることにより、この国が最初に日本の影響下に置かれてから成し遂げられた偉大な進歩が明白にされていた。地図や図表や先住民の等身大の人形を置くことにより、統監府は韓国人の生活の一般的側面を、非常に生き生きと表現することに成功した。」

更に日本の統治下で米や豆の生産が増大したことや韓国の鉱山の生産量の豊かさを示し、このような韓国の発展の原因を日本の教育にあるとして、「日本人が韓国で成し遂げた最大の改善事項の一つは、おそらく、国民の教育におけるものである。以前、韓国での教育は単に漢字と古典の勉強を意味していたが、現在では様々な目的で国中に設立された無数の学校にて、現代学問の多くの科目が教えられており、多数の若者が日本国内の学校に送られている。」と報告している。

### 4) 関東都督府と南満州鉄道

日露戦争後のポーツマス条約でロシアより譲り受けた関東州（遼東半島の先端部現在の旅順・大連の地域）と東清鉄道（長春以南）を防衛するために、1905（明治38）年関東総督府が設置され、本部は遼陽に置かれた。1906（明治39）年9月関東総督府は廃止され、欧米の対日感情に配慮して組織も軍制から民政へ移転され、関東都督府になり本部も旅順に変わった。同年11月、日本は東清鉄道（長春以南）および鉄道沿線を経営する為に南満州鉄道株式会社を設立した。関東都督府は関東州の統治と防備、南満州鉄道の業務監督や警備も受け持った。関東都督府と南満州鉄道は、中国における日本の植民地政策の極めて重要な役割を担っていたのである。

関東都督府の展示については、加藤駐英大使から小村寿太郎へ1909（明治42）年12月にロンドンタイムズの記事から次のような懸念が示されていた。「関東都督府に出品は奉天鼓楼を摸

造せるものの中に陳列せられ其中には満州産の大豆其他の産物をもって鍊鎌の喇嘛塔を模造せるもの清国人が大豆を運搬し及び豆油、豆糟を製造したる模型等を陳列せらるべき趣に有是果たして事実なるに於いては各国が満州問題に付て神経過敏となり居る今日本件は頗る意外たる結果を生ずるに至らざる」<sup>50)</sup> 日本が満州を支配下においている印象を欧米諸国に与える恐れを心配していたのである。それに対して大浦農相は小村寿太郎に次のように回答した。

「陳列物品は元々南満州鉄道株式会社の計画に依り同会社の営業状態 該鉄道沿線の風致景勝等を展示し乗客を招致せんとの純然たる営業的廣告手段に外ならず。倫敦タイムズの記事は全体を関東都督府の出品と誤解している。関東都督府の出品は別にあり、全然単独に南満州鉄道会社が出品している。」<sup>51)</sup>

関東都督府の展示区域は、障壁を以て南満州株式会社出品部と分けてあり、次のような品物が展示されていた<sup>52)</sup>。鋳物製品と同様に他の工業製品や繭、生糸、紬織物、タバコの展示品が入った回転するショーケースがあった。そして八角形の五重塔は石炭、豆、トウモロコシ、様々な種類の穀物のように南満州の異なる農業や天然資源で造られていた。日本政府によって関東州に設立された多種類の学校、音楽堂、他の公共機関の写真や大連の水道と下水など公共施設を整備した地図もあった。

南満州鉄道の展示は次のようであった<sup>53)</sup>。「南満州鉄道株式会社は、鼓楼を作り、同社の鉄道路線周辺の景色を示す写真でそれを飾った。展示物には、満州の女性の実物大の人形も含まれており、現地の様式で作られた部屋の中をこれらの人形が占めていた。豆や豆粕の運搬に使用する手押し車の模型もあった。また、とてつもなく重い巨大な石炭の塊も2つ展示されており、これを運ぶのは、アックスブリッジ・ロード（駅）の入口に立つ巨人を運ぶのと同じくらい大変であった。これらを展示することによって意図されたのは、この会社が（鉄道事業の他にも）鋳業、電気事業、ならびに築港において、いかに手広く事業を行っているか示すことであり、同時に、満州で見られる中国の風俗習慣を理解する手掛かりとすることであった。」

この地域の港湾、学校、図書館などの公共施設を見せることで、満州においても台湾、韓国と同様に日本政府が現地の人々の生活に如何に貢献しているかを示したのである。台湾日日新聞は1910（明治43）年2月23日に「日英博と台湾」という記事で、列強の中で英国は植民地国として最も先進し成功しており、日本が植民地経営に多少でも賞賛を得ることができたのは、英国の植民地政策を模範とし参考としてきたからだと述べ、「23号館に我植民地たる本島、樺太、満韓の産物を陳列するものなれば我国の膨張的地方を一館に集めるもの」<sup>54)</sup>としている。

朝日新聞記者の長谷川如是閑は、東洋館を「日本殖民館」と称し、台湾について「出品は台湾の樟脳を主として頗るジミなもの許りだが事細かに見る英人あれば頗る日本の実力を識認する事が出来やうと思ふ」<sup>55)</sup>

日本政府は、23号館で日本の植民地政策の成功を顕示し、アジアの盟主としての日本の地位を英国に認めさせようとしたのである。

## 5. おわりに

小村寿太郎は1911（明治44）年1月第27回帝国議会で、日英博覧会の成果を次のように誇った。「日英博覧会は英国皇室並びに同国朝野の最深厚なる庇護同情の下に遺憾なく其目的を遂げ我同盟国国民の多数は該博覧会に就き親しく帝国文化の深層と淵源を知悉し大いに両国民の親睦に資する所ありたり若し夫れ該博覧会が通商上に及ぼしたる影響に至りては其日英貿易将来の発展に貢献する所大なるべきことは本大臣の信じて疑ざる所なり」<sup>56)</sup> この演説から、小村寿太郎の日英博覧会を思い通りにやり遂げた達成感と欧州列国と肩を並べた大日本帝国への誇りが感じられる。日英博覧会において、東洋の国日本はすでに欧米の各国と肩を並べるほど力をつけていることを示したのである。

1910（明治43）年2月27日に日英博覧会事務官長和田彦次郎は総裁大浦に対して、倫敦商業会議所の国際博覧会委員会が日英博覧会に対する賛助を決議したことや、同会議所製造業部会が「日本出品の盛大なる計画に鑑みて一般英国製造業者に対し須らく出品すべきことを勧告した」ことを報告していた<sup>57)</sup>。英国人も貿易振興のために、日英博覧会に積極的に参加しようとしていた。

また数多く開催された饗宴により、度々英国の新聞に日本と英国の親密な関係を掲載されたことや、多くの有力な日本人と英国人が直接会う機会を得ることができ、相互理解が進んだ。英国の人々にも「日英博は日本の現地位を学ぶの機会を与え、之を学ぶと同時に、その従来抱ける誤解若くは迷想を打破するの動機と為りしものなり」<sup>58)</sup> という効果を与えたのである。

日英博覧会に日本政府が抱えていたテーマは、第1に日英同盟の強化、第2に欧州に日本の先進性を示すこと、第3に貿易振興、輸出の増大による国富の増加を図ることであった。日英博覧会に対する様々な評価はあるが、政府のこの目標はほぼ達成できたと思われる。この推進力となったのが明治政府のしたたかな外交政策とそれを支えた伏見宮親王殿下を中心とした皇室外交であった。

日英同盟は1911（明治44）年7月11日に更新され、1922（大正11）年まで継続した。1914（大正3）年第一次世界大戦において、日本は日英同盟を理由に三国協商側に立って参戦したのである。

## 注

- 1) 永山定富『海外博覧会本邦参同史料（第6編）』フジミ書房1997年、97頁。
- 2) 「日英博の半面」『台湾日日新報』1910（明治43）年7月13日。
- 3) 「日英博の教訓」『萬朝報』1910（明治43）年7月7日。
- 4) 國雄行「一九一〇年日英博覧会について」『神奈川県立博物館研究報告人文科学』第22号1996年、78頁。
- 5) 河村一夫「明治四十三年開催の日英博覧会について」（上）『政治経済史学』1981年6月28-38頁、同（中）1981年11月32-43頁、同（下）1982年3月18-26頁。

- 6) 伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館、2008年。
- 7) 宮武公夫「黄色仮面のオイディプス：アイヌと日英博覧会」『北海道大学文学研究科紀要』第115号 2005年、21-58頁。
- 8) 小村在英大使より外務大臣林薫宛書簡「日英博覧会ノ計画ニ関スル件」1908（明治41）年1月9日機密第1号、『英京倫敦ニ於ケル日英博覧会開設一件』（一）外交史料館所蔵。
- 9) 小村在英大使より外務大臣林薫宛電信「日英博覧会ノ計画ニ関シ意見照会ノ件」倫敦発本省着1908（明治41）年3月6日午前4時、第11号、同上。
- 10) 外務大臣林薫より小村在英大使宛電信「日英博覧会ニ関スル帝国政府ノ所見通知ノ件」1908（明治41）年6月23日、第51号（電送第1778号）、同上。
- 11) 古川隆久『皇紀・万博・オリンピック』中央公論社1998年40-47頁参照。
- 12) 農商務省『日英博覧会事務局事務報告』上、1912（明治45）年、16頁。
- 13) 「日英博覧会開催賛同ニ関スル閣議決定書」1908（明治41）年10月16日、前掲『英京倫敦ニ於ケル日英博覧会開設一件』。
- 14) 前掲『海外博覧会本邦参同史料（第6編）』46頁。
- 15) 前掲『日英博覧会事務局事務報告』上1-2頁。
- 16) 同上 3頁。
- 17) 同上 24頁。
- 18) 同上 17頁。
- 19) 「日英博覧会」（4月24日倫敦タイムズ及倫敦デーリーメール記事評）『東京朝日新聞』1909（明治42）年5月30日。
- 20) 「日英博と世評」『読売新聞』1910（明治43）年8月2日。
- 21) 前掲『日英博覧会事務局事務報告上』5頁。
- 22) *JAPAN-BRITISH EXHIBITION, 1910—Shepherd's Bush LONDON—OFFICIAL GUIDE*, p.1.
- 23) *The World's Work, June 1910, A Japanese Number, The Japan-British Exhibition of 1910: A Collection of Official Guidebooks and Miscellaneous Publications*, Masaie Matsumura, Eureka Press, 2011, Volume 5, pp.65-66.
- 24) 和田春樹「日露戦争と韓国併合」『東アジア近現代通史2』岩波書店2010年、37頁。
- 25) 伏見宮家編『貞愛親王事跡』伏見宮家1931年、8頁。
- 26) 筆者稿「万国博覧会と皇室外交—伏見宮貞愛親王とセントルイス万博—」『愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科篇』第35号、2010年。
- 27) 前掲『貞愛親王事跡』395頁。
- 28) 在英大使加藤高明より高平大使宛書簡倫敦発東京着1910（明治43）年4月29日午前8時10分第66号、『伏見宮貞愛親王殿下日英博覧会名誉総裁トシテ御渡英一件』外交史料館所蔵。
- 29) 在英特命全権大使加藤高明より外務大臣伯爵小村寿太郎宛書簡「貞愛親王殿下御来英ニ関スル件」第2174号、1910（明治43）年6月30日、同上。
- 30) 前掲『貞愛親王事蹟』406頁。
- 31) 「貞愛親王殿下御来英ニ関スル件」第2174号、前掲『伏見宮貞愛親王殿下日英博覧会名誉総裁トシテ御渡英一件』。
- 32) 前掲『貞愛親王事蹟』408-409頁参照。

- 33) 在佛特命全權大使栗野慎一より外務大臣小村寿太郎宛書簡「貞愛親王殿下佛国滞在中ニ関スル件」公62号、1910（明治43）年6月3日、前掲『伏見宮貞愛親王殿下日英博覧会名誉総裁トシテ御渡英一件』。
- 34) 前掲『貞愛親王事蹟』415頁。
- 35) 在独珍田大使より小村外務大臣宛電信伯林発1910（明治43）年4月20日午後3時20分、本省着1910年（明治43）年4月21日午前7時22分第23号、前掲『伏見宮貞愛親王殿下日英博覧会名誉総裁トシテ御渡英一件』。
- 36) 小村外務大臣より在独珍田大使宛電信（843）1910（明治43）年4月21日、同上。
- 37) 農商務省『日英博覧会事務局事務報告』下、1912（明治45）年、919-920頁。
- 38) 在倫敦坂田総領事より石井外務次官宛書簡、1909（明治42）年11月8日、第2175（一）号、『英京倫敦ニ於ケル日英博覧会開設一件』（二）外交史料館所蔵。
- 39) 前掲『日英博覧会事務局事務報告』下、925-926頁参照。
- 40) 同上933-934頁参照。
- 41) 『英京倫敦ニ於ケル日英博覧会開設一件』（三）3門15類2項、外交史料館所蔵。
- 42) 前掲『日英博覧会事務局事務報告』上、97-98頁。
- 43) 前掲『日英博覧会事務局事務報告』下、551頁。
- 44) *Official Report of the Japan British Exhibition*, op.cit., Volume3, p.283.
- 45) 周婉窈『図説台湾の歴史』平凡社、2007年、114頁。
- 46) *Official Report of the Japan British Exhibition*, op.cit., Volume3, pp.284-285.
- 47) *A Reprint of the Times Japanese Edition, July 19,1910*, op.cit., Volume4, p.291.
- 48) 「日英博出品予算」『読売新聞』1909（明治42）年9月1日。
- 49) *Official Report of the Japan British Exhibition*, op.cit., Volume3, p.291.
- 50) 「日英博覧会に於ケル満州物品ノ陳列ニ関スル件」機密第72号、1909（明治42）年12月13日起14日発、前掲『英京倫敦ニ於ケル日英博覧会開設一件』（二）。
- 51) 「日英博覧会に於ケル満州物品ノ陳列ニ関スル件」1909（明治42）年12月14日起1909（明治43）年1月11日発遣、同上。
- 52) *Official Report of the Japan British Exhibition*, op.cit., Volume3, p.290.
- 53) Ibid.,p.289.
- 54) 「日英博と台湾」『台湾日日新聞』1910（明治43）年2月23日。
- 55) 長谷川如是閑『欧米遊覧記：第二回世界一周』朝日新聞1910（明治43）年10月、520頁。
- 56) 「小村外相の演説」『東京朝日新聞』1911（明治44）年1月25日。
- 57) 日英博覧会事務局官長和田彦次郎より日英博覧会総裁男爵大浦兼武宛書簡、1910（明治43）年2月17日、『英京倫敦ニ於ケル日英博覧会開設一件』（三）外交史料館所蔵。
- 58) 「日英博の閉会」『読売新聞』1910（明治43）年10月29日。